

学校統合におけるスクールカウンセラーの役割

三 谷 理 絵 (愛知教育大学教育臨床総合センター)

三 谷 聖 也 (愛知教育大学心理講座)

The role of School Counselor in school integration

Rie MITANI (Aichi University of Education, Center for Clinical Practice in Education)

Seiya MITANI (Aichi University of Education, Department of Psychology)

要約 本研究は学校統合に関してシステム論に基づく学校支援を行なった2校の事例を学校変容のプロセスとして考察したものである。本研究を通して、男女共学化とは単に男子生徒と女子生徒が物理的に一緒に学ぶということだけではなく、男女共学校という新たなジェンダーアイデンティティを獲得するシステムの変容プロセスなのであり、その変容過程においては異なる価値観が拮抗する二項対立が起こりやすいことが示された。スクールカウンセラーがラジャースシステムを支援するには、個別カウンセリングのように個に寄り添う視点ではなく、学校全体に寄与する立ち位置を取り続けるバランス感覚が求められることも示唆された。

Keywords: 学校統合 システム論 ジェンダー

I 問題と目的

我が国は少子化に伴い人口減少が進んでいる。学校教育もその影響を受けており、多くの自治体で学校規模の縮小化が起こっている。自治体の財政的負担や小規模校としての弊害等も生じており、各自治体の打開策として学校統合の動きが各地で起こり始めている。しかしながら学校統合がなされればすべてが解決するという安易なものではなく、統合前後の期間において学校にはさまざまな問題が生じることもある。

スクールカウンセラーは平成7年度から導入され、児童生徒の不登校やいじめ問題の解決に寄与してきたが、スクールカウンセラーは個々の事例の支援だけではなく、学校システム全体の支援に資する可能性があることも指摘されている(三谷ら, 2011, 三谷ら, 2012)。学校統合という学校システムが大きく変容を遂げる過程においてスクールカウンセラーとして個々の支援以外にどのような支援が可能であろうか。

そこで本研究では学校統合後にスクールカウンセラーとして学校システムの変容を支援した2校の事例を提示し、その変容過程をシステム論に基づき考察することを目的とする。

II 方法

学校統合をした2校の事例を提示する。各事例の記述水準は児童生徒等の個々の事例ではなく、学校統合と直接、間接に関連すると思われる学校全体や中規模集団以上のいわゆるラジャースシステムで生じた問題やエピソードのいくつかを提示する。事例はシステム論(長谷川, 1987)およびジェンダー・センシティブな視点(平木, 2005)に基づき考察が加えられる。

尚、各校では並行して個人カウンセリング及び各ケースに関するコンサルテーションが実施されているが、本稿ではラジャースシステムの問題のみ抽出している。各校の基本情報は下記の通りである。

尚、A中学校・高等学校およびB高等学校の事例の記載にあたってはプライバシーに配慮し、内容の改変が加えられている。

A 中学校・高等学校:

公立の女子高等学校を母体とする進学校。男女共学の中高一貫校として学校統合がなされる。校名の変更もなされている。統合後の新設の中学校には地域の精鋭たちが入学してきたが、学年進行に伴い中学校からの直進組と高等学校からの入学組との学力差が生じている。統合初年度においては、スクールカウンセラーが中学校と高等学校のそれぞれ一名ずつ配置されていたが、統合3年目から学校メンタルヘルスにおける中高連携の必要性から中学校配置のスクールカウンセラーが高等学校も兼務する勤務体系に変わる。

B 高等学校:

私立の男子高等学校を母体とする進学校。女子生徒の入学を認める形で男女共学化が行われる。校名の変更はなされていない。共学化初年度の男女比は圧倒的に男子が多く、女子生徒は少数派の位置づけに留まる。共学化後も男子校の校風が残っており、女子生徒たちの多くは適応に困難を抱えていた。スクールカウンセラーが一名配置されていたが、学校管理下での事故が発生し、緊急支援スクールカウンセラーが増配された期間もある。

Ⅲ 結果〔事例の提示〕

1. A中学校・高等学校の事例

公立の女子高等学校を母体として男女共学の中高一貫校となった進学校。男女共学化および中学校と高等学校の統合という2つの水準の統合がなされている。もともと受容的な雰囲気校の校風であり、教育相談やメンタルヘルスにも力を入れてきたが、統合後は優秀な生徒たちが入学し、教師たちも指導に力を入れているため次第に上昇志向的な傾向も強まってきた。

筆者は同校の中学校のスクールカウンセラーとして統合初年次からおよそ週1日の勤務をしていた。この中学校は複数の小学校区から地域の精鋭たちが入学をしてきており、同じ小学校出身の友人等が少ないため、クラスの集団形成に課題があった。入学当初から半年ぐらいの期間は、集団としてのまとまりに欠けており、バラバラな印象であった。新設の中学校ということもあり、教員組織のつながりや連携もやや不十分であった。とりわけ生徒たちの集団形成に課題があるという見立てから管理職や担任と協議しスクールカウンセラーがランチタイムのグループに順々に入るようになった。同校ではこの時期はまだ給食が導入されておらず、各自がお弁当を持参しており、生徒たちは趣味の話やお弁当の中身の話題など個別性が際立つ話題が多くなされていたため、スクールカウンセラーは出来る限り学校行事などの共通の話題をするように心掛けていた。

半年程度このような期間が続いていたがここで2つの事件が勃発している。1つは新設の中学校に対して複雑な思いを抱く人物から匿名の怪文書が学校に届いたのである。以降、学校の外側に「敵」が存在しているという情報により職員室が一丸となって生徒たちを守ろうとする意識が高まって行った。もう1つの動きは保護者たちからの動きである。我が子を思いお弁当を作ってきた保護者たちも、半年程度続けると疲れを感じはじめ、保護者たちから給食導入の要望の声があった。学校側は保護者の意見を取り入れ学校給食の導入を決定する。弁当持参の時期からグループに入っていたスクールカウンセラーは、そのまま給食指導の補助としても関わるようになったが、生徒たちの様子の著しい変化が観察された。給食とは子ども達が同じものを食するというを意味するが、「このお魚美味しいね」とか「この煮物の味、私の口にちょっと合わない」など、生徒たちによくも悪くも共通の話題が生まれたのである。この2つの出来事をきっかけに、生徒たち同士、教員たち同士にシステムとしてのまとまりが生まれてきたのである。

しかしながら生徒たちと教員たちとの関係はあまり深まっているという印象はなかった。教員たちは生徒たちの指導はもちろんしているが同時に新しい学校を作り上げることに力注がなければならず、生徒との信頼関係構築が不十分とならざるを得なかった。そ

のような時期に、同校の学校裏サイトが立ち上がっており、匿名で学校批判がなされていることが判明した。当初学校側は成り行きを見守る姿勢を取っていたが学校に対する誹謗中傷など内容がエスカレートしてきたため、管理職からスクールカウンセラーに本件の対応についてのコンサルテーションの依頼があった。スクールカウンセラーは管理職と協議し首謀者と思しき個人を特定することは限りなく不可能であり、仮に特定できたところでさらに問題を潜在化させるだけであることなどの見立てを共有し、個人の問題探しをするのではなく学校全体の問題として本件を教育の機会として位置付けることを示唆した。具体的には、学校に対する批判内容について反論することはさらに生徒と教員との信頼関係を悪化させてしまう可能性があるが、実際に裏サイトを閲覧し確認したスクールカウンセラーが同サイトに同校の校章が無断で使用されている事実を発見し、その事実を取り上げることが有効ではないかと示唆をした。後日、校長判断で中学校全体の集会が開かれ、生徒たちに、「学校裏サイトが立ち上がっていることは一部の生徒たちは知るところかと思う。表現の自由を否定するつもりはない。しかしながら我が校の校章が無断で使用されていたという事実は、我が校として大変遺憾であり見過ごすわけにはいかない。違法性もあるだろう」という主旨で指導をした。つまり本件を生徒たちへの表現の自由と情報リテラシーに関する教育機会と位置付けたのである。これ以降、学校裏サイトへの書き込みは一気に激減し、しばらくして同サイトは閉鎖となった。生徒たちは本件を通して自分たちに真剣に向き合ってくれた教員たちの姿勢を観て次第に関係が深まって行った。

学校統合2年目は、中学校は2学年まで完成し、高等学校は2年生まで男女共学、3年生は旧女子高からの全員女子生徒たちの学年であり、多様な出自の生徒たちが同じ学校内に混在している状況であったが、初年次のような大きな揺れも少なかった時期である。

学校統合3年目からは中学校に勤務するスクールカウンセラーが高等学校にも兼務することとなった。中高の本格的統合に向けた学校メンタルヘルスの課題を扱うためである。学校統合3年目は、旧女子校から在籍している生徒たちは全員卒業を迎えており、全学年男女共学化をしており、中学校および高等学校は3学年が完成した時期である。

この期間スクールカウンセラーとしては上昇志向的な校風への適応に疲労感や困難さを感じた生徒たちの心理支援や不登校生徒の進路変更支援などの生徒個別の問題を扱うことが多かった。また熱心な保護者たちの中には子育てに戸惑いを感じている者も少なくなかったため、保護者向けのメンタルヘルス研修会や数回シリーズのカウンセリング学習会の開催なども実施した。この時期は中学校と高等学校は別個の学校とい

う認識に留まっており、中高の交流や連携の機会はそれほど多くはなかったため、学校全体の問題が顕在化せずに比較的安定していた期間であったともいえる。

学校統合4年目に突入すると、中学校からの直進者が高等学校に入学し直進者のクラスと高等学校からの入学者のクラスがそれぞれ編成されることとなった。直進者には高学力者が多く在籍しており、高等学校からの入学者との学力差が生じていた。そのような時期に、高等学校からの入学者クラスを中心に学年全体を含む集団の問題が発生している。ある女子生徒が過呼吸発作を起こしたことを発端に連鎖反動的に集団ヒステリーが連日ように発生。教員たちは頭を抱えていた。当初は教育相談担当の教員たちは彼らをメンタルヘルスの対象として支援にあたっており、発作を生じた生徒たちをひとりひとり保健室に搬送するという対応をしていた。しばらくは保健室のみで対応してきたが、過呼吸発作の生徒の影響で他の生徒の保健室利用にも支障が生じてきていることから、高等学校の養護教諭と管理職からスクールカウンセラーにコンサルテーションの依頼があった。スクールカウンセラーは観察と情報収集から始めた。発作を起こしている生徒たちの様子を観察すると、過呼吸発作を授業中に特定の1名が始めると、その発作に伴う頻回の呼吸音を聴いて同クラスの不安定な生徒に連鎖的に発作が起こり、ある時は他のクラスにも発作音が届いて他のクラスの生徒にも影響が出るということがあった。発作を起こしているメンバーは当初はランダムに見えたが、特定の数名がいることが次第に分かってきた。またこれらの生徒の多くは保健室への搬送後に発作が治まると、すぐにクラスに戻り授業を受けることがあり、そうするとたびたび授業が中断されてしまい他の生徒への影響も次第に出始めてきた。一部の教員からは授業に支障が出ており、教育相談担当の教員たちへの批判も高まっていた。特に生徒指導担当の教員から厳しい意見が寄せられていた。

スクールカウンセラーは後日、次の見立ての伝達と提案をすることとした。まず発作を起こしている生徒たちはメンタルヘルスの課題もあるが学校全体にとっては授業妨害でもあり進学校としてはゆゆしき事態であることを示唆した。また彼らは学力に関して劣等感を感じている可能性があることを示唆した。スクールカウンセラーとしては過呼吸発作を起こしたら速やかに保健室への搬送をするが、保健室利用した際は発作が治まるか治まらないかに関わらず教室には戻らないというルール、そして保健室では発作を起こした生徒同士は一緒に過ごさないというルールを設定し、さらにスクールカウンセラーの来校日にはカウンセリングを受けるという条件を付すという提案をした。

以上の対応を学校共通ルールとして導入することで、過呼吸発作の連鎖反応は沈静化し、その後は個別

のカウンセリングの支援対象として扱うことができるようになった。尚、個別カウンセリングでは過呼吸発作の中心人物であった女子生徒は、母の急病で家事全般を担いながら進学校に入学したことで、次第に家事と学業の両立がうまくいなくなり学習に次第についていけなくなっているという悩みがあったことが判明した。カウンセリングを通して悩みを言葉で表現できるようになると次第に症状も治まっていった。

2. B 高等学校の事例

B 高等学校は地域有数の進学校であった。男子校の伝統を持つB高等学校は法人の経営方針により男女共学化をすることになった。男子校の伝統が消えゆくことへの内外の反発も強く、特に卒業生から男子校の存続ができなくなることへの惜しむ声が寄せられていた。また恋愛にうつつを抜かしては学力低下を招くという主張を持つ者たちも一部含まれていた。そんな逆風のなかでの男女共学化であった。共学化初年度は、女子生徒たちの入学が部分的になされたが、女子生徒は少数派にとどまっていたため男子校の校風が大きく変わることもなかった。スクールカウンセリングには、男子校の校風に気後れする女子生徒の相談などがみられると予想されていたが、意外にも女子生徒はその校風に過剰に適応している様子がうかがわれた。男子校時代には当然と思われていた発言も、男女共学化後に女性のいる前で同様の発言をしてしまうとセクシャルハラスメントにあたる可能性があるが、こうした変化に無自覚な男子生徒や男性教員も少なからず含まれ、いつの間にか彼らが加害者になってしまっているというエピソードをスクールカウンセラーは耳にするようになってきた。形式的には男女共学化はしたものの、男性の意識の変革がなされないことにより、女子生徒が直接間接に犠牲を被るという構造になっていた時期である。意識の変革が不十分であった理由には、男女共学化に伴い同校の校名の変更がなされなかったということも影響しているかもしれない。そんな矢先に学校管理下の学校行事の最中に、女子生徒複数名が交通事故に遭うという痛ましい事故が起こってしまった。女子生徒たちは一命をとりとめたものの被害の程度は重症であった。本事故について学校は学校全体レベルの危機としての認識に乏しく一部の事故としての認識に留まっていた。

その後も悲劇は続く。学年行事で外出した際に、別の女子生徒複数名が再び交通事故に遭ってしまい、命を落とすという痛ましい事故が起こってしまったのである。本件は学校全体の問題として大混乱に陥ってもおかしくない事故であったが、意外にも学校は平静さを保っていた。目撃している生徒たちへの影響も懸念されたことから、学校側の要望と教育委員会の方針で配置スクールカウンセラーに加えて緊急支援カウンセ

ラーが増配となった。両スクールカウンセラーが連携しながら急性期の支援にあたる時期を経て、配置カウンセラーは日常性の回復のため当該学年に入り、個別に生徒のヒアリングをしてスクリーニングをするとともに、当該学年の学年集会で心理教育を行なうなどの支援を行なった。具体的には進学校では悲しい出来事があったとしても容赦なく進学に向けて前に進まなければならない、同級生の追悼に時間を十分に割くことができないことへの罪悪感を生じやすいことなどにふれ、意識的に時間を決めて追悼の時間を作るようにという示唆もおこなった。また事故現場を目撃した女子生徒に対しては、個別のカウンセリングを実施し、罪悪感の低減とレジリエンスを高める支援を行なった。

一時、被害生徒の保護者が学校の責任を追及し訴えるという動きもあったが、生徒や教員が生徒の墓前で手を合わせる姿を見て、保護者は我が子が学校に愛されていたこと、そして何より生徒自身が学校を愛していたことに気づき保護者は訴えを取り下げたという。カウンセラーとしては遺族へのケアも気になる場所であったが遺族とは一定の距離をとり、間接被害者である生徒のケアに一定期間従事した後は、主として教員へのコンサルテーションおよび罪悪感や自責の念の低減に資する支援に従事した。これは学校に雇用されているスクールカウンセラーとして、被害者に同一化し過ぎず学校と敵対しない位置で学校全体を支援することの重要性を緊急派遣スクールカウンセラーから指導されたことにもよる。教員たちからスクールカウンセラーは心のケアについてアドバイスを求められることがあったが、日本人がすでにやっている弔いの儀式を重ねることが一番の心のケアであることを示唆し、特別なことではなくいままでの対応が一番よいと保障することで、教員たちは安心して日常的教育業務に取り組むことができるようになっていった。

しばらくして同じ部活動の上級生たちから亡くなった生徒を悼む声が寄せられ、ここには女子生徒のみならず男子生徒からの声も含まれていた。このエピソードにより、本件は学年や女子生徒の集団だけに閉じられた限定的なエピソードではなく、学校全体の危機であったことが次第に分かってきた。

しかしながら悲劇は繰り返されてしまう。翌年、ふたたび事故が起こってしまった。女子生徒の悲劇が続いたが、今度は男子生徒が下校中に交通事故の被害に遭い命を落としたのである。

この数年間はB高等学校にとっては痛ましい事故が相次いで起こった期間であった。男女共学校としての新たな歴史を刻むという前向きなモードとは明らかに異なる、喪に服することから始まる悲しい幕開けであったと言える。数年後、同校には二度と悲劇を繰り返すことのないよう、生徒からの要望により校内に犠牲者を弔うための石碑が立てられたという。

IV 考察

1. A中学校・高等学校の事例の考察

A中学校・高等学校の事例についてシステム理論に基づき考察を加える。まずシステム理論とは何かについて述べる。長谷川（1987）によれば、システムの3要素は全体性、自己制御性、変換性とされる。自己制御性と変換性を合わせて自己組織性と称される場合もある。このシステム理論を学校システムに当てはめるならば、全体性とは学校のアイデンティティに関わる領域であり集団が社会的に登記され、集団の内外を分かちつものでもある。自己制御性とは学校の伝統の維持など学校が恒常性を維持しようとする機能であるが、学校が変革期にある際には自己制御性が問題を維持する悪循環を来す場合もある。変換性とは集団の恒常性を維持する一次変化から別のステージへと不連続な変化を遂げる第二次変化のこと、すなわち「変化についての変化」を示すものである。

次に上記の視点に基づきA中学校・高等学校の学校統合のプロセスを考察してみることとする。まず開校当初は生徒たち教員たちの個性が前面に出ているバラバラなシステムであったと考えられる。そこに一石を投じる2つの出来事、すなわち外部から怪文書が届いたという事件および給食の導入がなされたことにより、学校システムの凝集性の高まりが起こってきたと考えられる。それに伴い学校システムの内と外の境界線が明確になってきたといえる。ここで興味深いことは、生徒や教員の内部からの動きではなく、学校を取り巻く保護者や地域からの動きにより、凝集性が高まったということである。システムの全体性とは内側から同定するだけでは不十分であり、システムの外側との関係において社会的に定義づけ直すというプロセスも重要であることが示唆される。また給食の導入前後の様子を観察することができたことで、同一のものを食するという体験が学校を一つにまとめるという機能があることが示された点も意義ある知見であったと思われる。

その後の展開として、学校裏サイトに関する事件が発生している。前述の2つの出来事を通してシステムが辛うじてひとつのシステムとしてまとまり全体性の外枠が出来つつあったが、新設校の整備で多忙な教師と生徒たちの間では信頼関係の構築までには至っていなかった。そのため一部の生徒たちには教員主導の枠組み作りに賛同しかねる思いが次第に募り、彼らをそのような行為にかきたてたものと推察される。このように水面下では学校の「表」と「裏」をめぐる攻防があったわけであるが、学校の対応としては、生徒たちの表現の自由の権利を一部認めつつも、校章という全体性の象徴を巧みに示しながら、「表」を選ぶか「違法性を伴う裏」を選ぶかという選択を各々に暗に

迫ったわけである。また知的に高い生徒たちにあえて「表現の自由」や「違法性」などという知的な大人の語を駆使した点も彼らを指導する上で有用であったと考えられる。こうしたエピソードを通して、新設校である中学校は学校としての全体性をより確実なものとしていったものと考えられる。

その後の学校統合4年目の過呼吸発作の集団ヒステリーのエピソードは、中学校と高等学校がいよいよ本格的に真の意味で統合する時期に起こっていると考えられる。旧来の女子校の流れを引き継ぐ高等学校は、元々受容的な雰囲気があり仲間意識や協調性を重んじるような伝統を有していた。一方、新設の中学校は脱ゆりの競争的・上昇志向的な校風である。中学校からの直進の生徒たちがいよいよ高等学校に進学し、従来の校風に新たな校風が入り込むこととなる。もちろん同校ではすでに3年前から男女共学化をしているが、比較的穏やかな男子生徒が進学していた事実を鑑みると校風の変容はいまだなされていない可能性も示唆される。統合後いよいよ本格的に競争的・上昇志向的な直進者が進学することで、これまでの校風に慣れ親しんでいた生徒や教師の中には異なる気風の生徒たちの到来に違和感を覚え、一部は劣等感を感じざるを得ない生徒たちも含まれていたものと思われる。過呼吸発作の集団ヒステリーはこのような時期におこった象徴的な出来事であると考えられる。当初は集団ヒステリーに対して、旧来の校風でのスタンダードの受容的な対応で接してきたが、変革期においてはその解決努力がかえって問題を維持してしまう悪循環を来していたと考えられる。旧来の支援方針では、おそらく彼らは、心に不安を覚えている生徒でケアの対象であり、発作が治まったならば、彼らは授業を受ける権利を保障されるという認識となるだろう。つまり彼らは全面的にケアの対象となる。しかしながら、競争的・上昇志向的な校風の視点から考えるならば、彼らの発作によって他の生徒たちは授業の中断を余儀なくされてしまう授業妨害行為であり、発作が治まった時点でクラスに戻ると再び授業中断を余儀なくされるため、同一期限内に二度にわたって授業妨害行為がなされるという認識になるのである。つまりケアの対象というだけではなく他の生徒の学習権を侵害しているため生徒指導の対象でもあるという認識なのである。スクールカウンセラーは、本エピソードを通して学校システム全体の変換性を導くべく、旧来の視点と新しい視点は両方とも大切であることを示すべく提案を行っている。すなわち進学校として授業妨害が続く事態は看過できないので過呼吸発作発症後は速やかに保健室でケアをする、ただ中等半端なケアは望ましくないなので完全にその時間は休ませ、さらにはカウンセリングを通して徹底的にケアするという対応の変更を求めたのである。これはどちらか一方の校風を優先させ

るのではなく、両者の校風を取り入れた新しいルールの導入であったと考えられる。こうしたルール替えによって学校が新たな段階へと移行し、男子生徒と女子生徒が物理的に一緒に過ごすというだけではなく、男女共学校としての新たなジェンダーアイデンティティの獲得がもたらされたものと推察される。

以上のようにシステム論とジェンダー・センシティブな視点に基づき学校を捉えるならば、ラジャーステムの問題に目を向けることができるようになる。個別のカウンセリングだけではなく学校全体をシステムとして捉える視点を持つことは学校統合において有用であると考えられる。

2. B高等学校の事例の考察

B高等学校の男女共学化のプロセスについても同様にシステム理論に基づき考察を加えることとする。まず学校システムの全体性に関してであるが、同校は男女共学化にあたって校名の変更は行われていなかった。そのため旧来の男子校の流れを引き継ぐ生徒や教員の一部は、新しい学校に変容したという認識に乏しいものも含まれている。名称の変更は行われていないが、男子校である同校はすでに終焉を迎えているのである。学校の校舎等のハード面や校名の変更などの大幅な変更がなされたわけではないため、生徒や教員の一部は、明確な喪失体験をしているわけではなく、「あいまいな喪失」(Boss, P., 2015)を体験していたものと推察される。しかしながらこのような「あいまいな喪失」の状態であることは、新たなステージへと進むことを困難にさせてしまう一因となってしまうことも指摘されている。そのため一部の生徒や教員は女子生徒の入学を前向きに受け入れることができず、心理的には否認をしてしまっていたのではないかと推察される。このことは男女共学化した新たな学校になったにもかかわらず、従来のスタイルを変えない生徒、教員の行動からもうかがい知ることができる。旧来のスタイルは旧来のシステムにおいては問題とはならないが、新しいシステムで旧来のスタイルをとってしまうという自己制御性の発動は、他者にとって加害行為となってしまう危険性があるのである。変換性への抵抗すなわちルール替えができない、あるいはしようとしにくい人物は、無自覚に他者に対する加害行為を働いてしまうこともあるのである。男女共学化においては、男子校にとっての当たり前と思われることが女子生徒にとってハラスメントになり得るなどの心理教育をしていくことが求められると言えるだろう。つまり女子生徒や女性教員を被害者にさせないように守っていくと同時に、男子生徒・男性教員を身に覚えのない不幸な加害者にしてしまわないように守ることもスクールカウンセラーの重要な役割であると思われる。

次に同校で相次いで起こった事故について考察す

る。女子生徒たちが交通事故にて犠牲にあったことは、当初は同校にとっては衝撃的な出来事であったにもかかわらず、直視することがまだできる状態ではなく感情を鈍麻させることが精一杯であったように思われた。これは共学化した当初において女子生徒たちの存在はいまだなじみのない異質な存在であったこととも相まってスプリットすることにより対処せざるを得なかった状況であったものと推察される。「あいまいな喪失」の状態、前に進むことを否認しておりある意味時間が止まったままの彼らにとっては、新しい対象への関心が薄くなってしまっていたと考えられる。はじめの二度の事故は女子生徒が被害者であったものの、そのまま前に進めないでいたことにより男子生徒までもが被害に遭ってしまい、いよいよ学校は現実を目を向けざるを得なくなったのではないかと考えられる。

この期間、スクールカウンセラーとして行ってきた支援は、学校緊急支援として被害に遭った生徒たちやその担任のケアが中心であったが、異なる水準で捉えるならば同校の学校システム全体の課題である「喪失に伴う哀しみ表現の保障とレジリエンスの促進」をしてきたのではないかと考えられる。同校における相次いだ事故の発生は、「あいまいな喪失」の状態のままでは新たな学校システムがいつになってもはじまらないことへの学校システム内部からの一種の警告のサインであり、同校は一度、男子校の終焉という喪の作業に徹する時期を学校システムが全体として体験していくことが必要であったのではないと思われる。生徒の犠牲のエピソードを通して、学校全体が喪の作業を体験することを経て、ようやく新たな学校としての幕開けがもたらされたといったものとも考えられる。そして生徒たちからの要望により設置されたモニュメントは、犠牲に遭われた女子生徒と男子生徒を共に追悼するものであったが、これは新たな学校システムの全体性、すなわち男女共学化の象徴としてこれからも同校に生き続けるものになったと考えられる。

V 総合考察

本研究では2校の事例を通して、男女共学化は単に男子と女子と一緒に学ぶという物理的な問題だけではなく、学校全体として男女共学校としての新たなジェンダーアイデンティティを獲得していくプロセスであることも明らかにされた。スクールカウンセラーとして学校システムを支援する場合の多くは自己組織性を支援することにあると言えるが、とりわけ学校統合などの変革の時期においては学校とは何か、この集団は何者であるかというシステムの全体性に関わる支援にも及ぶと言えるだろう。

本研究では2校の事例を通して学校統合の過程を示してきたが、学校の変革の時期においては、個別カウ

ンセリングはもとよりラジャースシステムの問題が前面に出てくることがあると考えられる。通常のスクールカウンセリング業務の枠に加え、ラジャースシステムの支援に携わるならば、通常の勤務枠だけではカバーしきれないと考えられる。そのため勤務時間の柔軟な変更や増配などによる補償なども求められると言えるだろう。

またA中学校・高等学校やB高等学校では、新たな校風になじめない人々が今まで通りを続けようとする解決努力が問題を維持していたり、またB高等学校の事例では、「あいまいな喪失」に伴う心理的停滞が周囲の人々に対する加害にまで発展する危険性が示唆された。同一学校内に表裏、男女、新旧、被害者－加害者など二項対立が存在している場面においては、スクールカウンセラーの立ち位置を迷うシーンもしばしば起こり得るだろう。個別のカウンセリングでは相反する個々にそれぞれ個別に寄り添うことは守秘義務という枠によって集団内でも矛盾がなく併存させることができるのであるが、ラジャースシステムの支援にスクールカウンセラーとして携わっていく際には、誰か特定の人物に肩入れをすることは別の誰かと敵対することを意味する。そのため学校システム全体に寄与するポジションにどうやって居続けることができるかを常に考え、その場で決断していくバランス感覚が求められると言えるだろう。

本研究では男女共学化に伴う学校システムの変容過程について検討したが、本研究で得られた知見は、男女共同参画社会の推進や女性の社会進出に伴うリスクの発見と予防にも寄与する可能性が示唆される。今後は成人コミュニティに関しても同様の研究を展開していくことが求められると言えるだろう。

VI 引用文献

- Boss, P. (著) 中島聡美・石井千賀子 (監訳) あいまいな喪失とトラウマからの回復：家族とコミュニティのレジリエンス, 誠信書房, 2015
- 長谷川啓三 家族内パラドックス―逆説と構成主義― 彩古書房, 1987
- 平木典子 ジェンダー・センシティブな夫婦・家族療法 精神療法, 31 (2), 2005, pp171-176
- 三谷理絵・三谷聖也 東日本大震災における被災校と受け入れ校の心理学的関係調整に関する研究 愛知教育大学教育臨床総合センター紀要第2号 2012, pp23-28
- 三谷聖也・三谷理絵 学校カウンセラーとしてのソリューションバンク 子どものこころと学校臨床第6号所収, 遠見書房, 2011, pp20-29